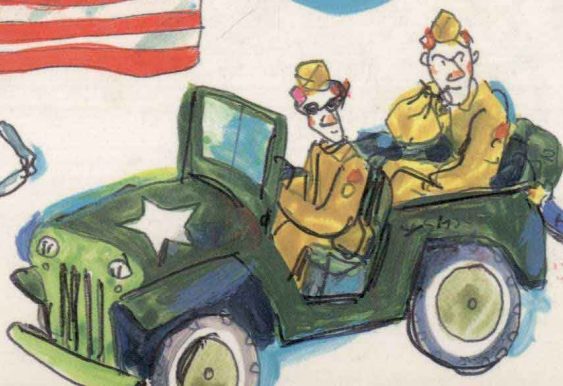
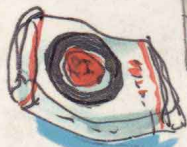
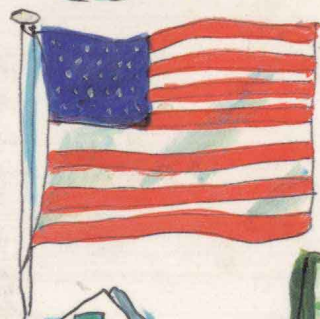


港の見える丘物語

マダム篠田の家

YOKOHAMA 1945-50

赤塚行雄



港の見える丘物語

マダム篠田の家

YOKOHAMA 1945-50

赤塚行雄



港の見える丘物語 **マダム篠田の家** YOKOHAMA
1945-50

1989年 7 月30日 第 1 刷発行

著 者 赤塚行雄

発行者 栗生一郎

発行所 第三文明社

東京都千代田区三崎町 1 の 1 の 9

〒101 TEL : 03 (294) 8731(代)

振替 : 東京5-117823

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 株式会社星共社

©YUKIO AKATSUKA, 1989 ISBN4-476-03153-6

許可なしに、転載・複製することを禁じます。

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

はじめに

これは、ささやかな私の青春物語であり、ちょっと気取った言い方をゆるしてもらえるならば、同時に一種の記録文学ドキュメンタリーでもあり、また文明批評でもある。このような叙述形式になったのは……、君江、お前の存在のためだ。お前を抜きにしては、私は、あの時代を語れない。

——私が、まだ少年だったころ、途方もなく大きく、神話的に拡大してしまった戦争が、ある日、ふいに敗戦というかたちで終った。まだ一四歳だった私の臘ろうのように柔らかな心には、時代の刻印が、ジュッと音をたてるように焼きつけられた。

私は現在、名古屋の大学（中部大学）に通っているが、この大学はもともとは工業系の大学だった。ある日、初代学長が学長室としてつかっていた部屋——今は、応接室になっているのだが、その部屋の書棚で『敗戦時の裏面秘録 罪悪と栄光』という限定出版の珍しい本を見つけた。この出会いが私の宿命のように思える。これは、敗戦時の占領軍接伴せつばん副委員長を務めた鎌田銚一かまた せんいち陸

軍工兵中將の側からまとめられたもので、

「おや、やはりそうだったのだナ」

と考える記述がたくさんあった。鎌田中將はアメリカ帰りの將軍で、はじめ彼が接伴委員長になることに決まっていたが、工兵中將なので傍系として遠慮し、陸大出の有末精三中將に委員長を譲り、副委員長となった。これまで占領軍先遣隊到着のようすなどみな有末委員長の発言で書かれているが、鎌田中將の記述をみるとあれこれ微妙に異なっている。いや、重光外相などが言っていることなどに対し、積極的にそんなカッコいいものじゃなかったゾと、怒って発言している部分などもある。

ある年、私はテレビ神奈川のレポーターとして「敗戦時の回顧」という番組をもったが、このとき、マッカーサー元帥を厚木飛行場から横浜のホテル・ニューグランドまで直接に護衛した元警部の白井長太郎と出会った。同時に、また、神奈川県庁の内務部渉外課長だった西田喜七にもお目にかかる機会を得た。こうした人々の証言を聞いても、鎌田副委員長の話と符合する。今まで、歴史家たちはどうしてこうした現場を支えた人々の証言を集めなかったのだろうか。

ここでは、占領史となるとかならず引用される有末精三や鈴木九万や岡崎勝男といった人々の側からの発言ではなく、鎌田銓一や西田喜七らの証言を中心にして、「第一次占領地区」の少年の快感を大切にしながら、敗戦直後の横浜のようすを再構成している。西田喜七と共に活躍した

九名の当時の事務官たちともお会いいただいたが、取材にずいぶん多くの歳月を要し、ようやくまとめることができた。

西田喜七やその部下の人々の話には……、君江、お前のマダム篠田の思い出もでてきた。いや、最初にでてきたのは、

「横浜には凄^{ひと}い女がいた」

という話だった。

「あの女^{ひと}には、ずいぶん陰で助けてもらいましたよ」。そう異口同音に言っている。

西田喜七には、いっしょにマダム篠田の家を確認するために山手にまで出て来ていただいた。

私にとっては、「えのき亭」のあるあたり、あのあたりは、一種の鬼門なのだ。お前のことなど、急にいろいろな想いが去来し、哀しみにうちひしがれる。けれども、この上なく、なつかしくもある。

お前たちが騒いでいた斎藤分町のあの家からすこしへだたったところに、私は何年か前に家を建てた。ドーマーのついたグレイの外壁の家で、私の二階の書斎の窓辺では、桜の木が今、わつと音をたてるようにいっせいに花をひろげだしている。今夜あたり、どうだろうか、君江。昏れ残る桜の木の花灯^{はなあかり}りが目じるしになるだろう。私の女房にも会ってもらいたい。私は、電気を消して、書斎の椅子にもたれて、待ってよう。

ただ、君江。びっくりしないでもらいたい。私は、もうすっかり老人になってしまった。お前に会うのが恥ずかしいくらいなのだ。私は「お兄ちゃん」ではない。「おじいちゃん」なのだ。でも、この空しい人生、今宵一夜ぐらいいは、お前の笑い声、お前の髪の毛の匂い、お前の想い出で、この書齋を充たしたい。たちまちに過ぎ去ってしまったあの時代、しかし、日本の重要な転機になったあの混乱の時代に対していっしょに、泣き笑いしながら乾杯しようではないか。

今は亡き、君江モリソンの霊に捧げる。

一九八九年四月四日

著者

目 次

目次

はじめに

I

横浜山手・榎の木かげの古い洋館——10

想い出はレンブラントの絵のように——21

パンパン宿の隣の家の少年——29

戦後民主主義と闇屋的価値観——41

「人間は自分自身を売つたらおしまいなのよ」——49

母親たち、姉たちの活躍——54

高位の愛欲の尼僧のように——59

「汚れた巷に生きている以上は……」——63

II

鎌田銓一中将と先遣隊長テンチ大佐——74

特攻隊の豪壮な秘密の地下壕——82

「すべての日本人を去勢してしまえ」——90

マッカーサー元帥、厚木に到着する——101

人類学者ジョン・エンブリーの予測——110

III

病人まで逃げ出したというのに——120

「ヘルム・ハウス」殺人事件——128

「大安クラブ」の安藤明や女性たちのこと——133

たとえば「葉亭四迷の「股間政策」のことなど」——141

IV

- 「直接軍政」か「間接統治」か——149
- 「リンゴの気持はよくわかる」——159
- 日本独特の「逆装法」について——164

神奈川県庁に現れたマダム篠田——174

「激せず、躁がず、競わず、随わず」——182

米軍物資の放出第一号はかくして——192

マダム篠田の家のパーティ——199

素直な、気分のよいサービス——205

日本の「神」は「God」ではない——211

私たちの内なる日本的心情——221

V

NHKの「カムカム英語」のことなど——232

カミソリのお蘭や血桜の小夜子のこと——247

厳しかったアメリカ第八軍憲兵司令部——252

吉田橋のたもとで……——257

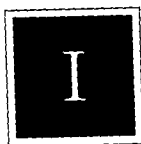
「お兄ちゃん」という対幻想について——268

そして歳月が流れて……——279

「さのうの薔薇はただその名のみ……」（あとがきとして）——287

装画・イラスト／篠崎三朗

ブックデザイン／森美恵子



横浜山手・榎の木かげの古い洋館

外人墓地の脇の石畳の坂を登って行ってもよい。フランス橋の方から登って行ってもよい。フランス橋の方から行くとゲート座の前を過ぎ、突き当りの外人墓地のところに左に折れる。レストラン十番館があり、山手資料館があり、やがて聖公会のいかめしい建物が見えてくる。

聖公会を過ぎるあたりに、大きな樟くすのきがあり、さらにこれと競い合うように天を摩もしている榎えのきがあって、街路の方にまで枝をひろげているが、この榎の木かげに「えのき亭」というコーヒーハウスがある。

ひと頃、『アンアン』とか、『ノンノ』とかいった若い女性向けの雑誌に、よく写真がのった可愛らしい二階建ての白い家で、屋根は赤い瓦、ひさしや窓わくは青色に塗られている。

玄関の両脇の石で囲われた植込みには、いつも季節の花が咲いていて、小さな前庭の芝生も綺麗に刈りこまれ、白く塗った鉄製のテーブルとベンチが置かれている。戦前からの古い洋館で、この家にはかつては極東裁判で活躍したアメリカ人判事が住んでいた。

ところで、今は取りこわされてしまい新しい家になってしまっているが、敗戦直後のころは、

この「えのき亭」とちょうど同じ形の家が、その向こう、セント・ジョセフ・カレッジの手前にも、もう一軒あった。

マダム篠田の家である。

一九四五年、敗戦直後の九月のはじめの、ある晴れた日の午後、占領軍のジープが坂を駆けのぼってきた。

セント・ジョセフ・カレッジは、今は、カレッジではなく、インターナショナル・スクールという名称に変っているが、このセント・ジョセフの真向いの家は、すでに占領軍に接收されており、第八軍のさる高官が入る予定だった。その家に近いという理由もあって、ジープから降りたスコット少佐は、薔薇の花が咲き乱れているマダム篠田の家を見上げて、

「ここがよろう」

と、曹長に顎をしゃくった。

二人が前庭に入って行くと、手に花鉢をもった三十前後の色白の女性が家の裏の方から出て来た。素足にサンダルをひっかけている。すらりとした脚である。黒髪を無造作に後で束ねて、化粧などしていなかったが、あまりの眩^{まばゆ}さに、少佐は思わずハッとした。ながい歳月、戦場をかけめぐり久しぶりに見る女性、しかもこれまであまり馴^なれ親しんでいない黒い瞳の東洋の女性だっ

たのでなおさらだったのであろう。

少佐が思わず見とれてしまっているようすをみて、「ヘルムハウス」にも一番乗りした百戦錬磨の曹長がニヤニヤし、そのニヤニヤを押し隠そうとするかのようにチューインガムをやたらとくちやくちや噛んだ。

接収するために、ちよいと中をみせてもらおうと思って入ってきたのだが、思いがけない美女の出現で少佐はめんくらっていた。

彼女が、

「なにか？」

と言った。

「綺麗な薔薇ですね。一本いただきたくて寄りました」

少佐が、そう答えるのを聞き、曹長は、もう、こらえきれなくなって、少佐の脇腹を突き、喉をくつくつとならして笑い声をもらした。少佐も、てれながら笑った。その笑い顔が女主人の警戒心をゆるめた。人のよさそうな曹長は、少佐よりはやや年長にみえた。少佐は背の高いハンサムな男で、知的な印象を与えた。

「ちょうど剪^きろうと思っていたところです。一本だけじゃなくて、もっとたくさんさしあげますわ」

彼女も陽気に答えた。

その笑顔には気品があり、どこか芯の強そうな理知的なところと人なつこそうな優しさとが混在していて、しぐさと一体になって少佐を圧倒した。彼女が流暢な英語をしゃべっていることに気づき、またまたびっくりしていた。

帰りぎわ、薔薇の束を紙に包んでもらいながら、少佐は、少年のような真面目さで、

「そのうち、また遊びに寄っていいでしょうか？」
と聞いた。

「いつでもどうぞ」

彼女の答に胸をときめかせた二人は、彼女の名前を聞くのも忘れてひきあげていった。

彼女の名前は、篠田実可子といったが、スコット少佐たちは、彼女の本名を知らないままマダム・リルと呼び、リルの噂はたちまちのうちに広がった。リルといえば、私たちは、一九五一年（昭和二六年）ごろに大流行した「船をみつめていた、ハマのキャバレーにいた、風の噂はリル……」という津村謙がうたう歌謡曲を思い出すだろう。上海帰りのリルを探して歩く男の歌である。リルは、リトルのなまりであり、大ヒットしたこの流行歌にしても、戦前のアメリカ映画『上海リル』の主人公をヒントにしてできたものだ。少佐は、ブラウン大学の学生のころ、この映画を故郷の町でみたことがあるが、実際に面白いことに実可子は、かつて上海でダンサーをし

ていたという噂もあった。

流れ来る メロディ

高らかに 口ずさめば心はずむ

街の女王 洒落たリル

思ひ出すよ 輝けるけしの花の粹なリル……

実可子は、かつて松竹少女歌劇の主題歌にもなったW・デュピンの『上海リル』を上手に歌ったりもした。

彼女は一九一四年（大正三年）に、熱海のある素封家の娘として生れた。母親は結核で彼女が幼いうちに他界し、祖母が彼女を育てた。「この子は寅年の生れで男運が悪いから、勉強して学校の先生にでもなってもらいたい」というのが祖母の口ぐせだったという。横浜のミッシオン・スクールに学んだが、父親が株で失敗し、可愛がってくれていた祖母も亡くなってしまった後、彼女はあちこちで苦勞し、ひところは上海で働いていたという。

とにかく、この出会いがきっかけとなって、マダム篠田の家が第八軍の高級将校たちのサロンになったのだった。ところで、マダム篠田は、当時のいわゆるパンパンガールの一人かというところ、かならずしも当たっていない。パンパンとは占領軍の兵士に行きあたりばったり肉体を売って金